

大宅 昌

生きて花

老いて華



生きて花
老いて華

大宅
昌

海竜社

大宅 昌（おおや まさ） 明治39年10月、富山県に生まれる。富山県立富山高等女学校卒業。富山県女子師範学校第2部卒業。7年間教職にあり。昭和6年5月大宅壮一氏と結婚。1男3女。昭和45年11月22日、大宅壮一氏と死別。現在、財団法人の「大宅壮一文庫」理事長。著書に『大きな駄々っ子』『ただ一人のひとに』『愉しく生きる老い』『よく生きる よく老いる』などがある。

生きて花 老いて華

平成六年六月二十七日 第一刷発行

平成六年七月二十日 第二刷発行

著者 大宅 昌

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二ノ十四ノ一（〒104）

電話東京（〇三）三五四二一九六七（代表）

振替口座 〇〇一一〇一九一四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か小社へお申しいでください。

印刷所 新協印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

©1994, Masa Ohya, Printed in Japan

生きて花

老いて華

目次

〔心は青春、老いは恵み〕

生かされて今、老いに華あり

ひとり老いて今日を生きる—— 8

老人呼ばわりされたくない—— 14

往きはよいよい復かえりは強こわい—— 18

老いてこそおしゃれのたのしみ—— 21

八十八歳、ひとり暮らしを謳歌—— 24

老いの勲章—— 27

心友あつてのまたとない老い—— 31

アゲイン、ありがとう—— 35

〔夫婦は相身互い〕

闘いすんで夫に感謝、これ好日なり

スカウト結婚で四十年—— 40

お前はなんとジャーナリスチックな奴だ！—— 45

驚きをこえて、淋しさの中の新生活	48
孤軍奮闘の自宅での出産	51
ああ十五回！ 引越は何のため？	54
夫の身許引受人は誰あらん	58
凝り性が夫のパワーを生むのか	62
にわか農民へ大変身	67
晴耕雨読より立ち上がる	71
旅は財産	75
あなたの道楽は文庫として結実しました	79
ライフワークは早めに取りかかり給え	82
わたくしの人生で最も辛く悲しかったこと	85
君に、母からの感謝を	88
命を張った豪放にて繊細の男	91
最初で最後のありがとう	95
今あるは夫より受けた余光のおかげ	99

八十八年、生きて今ある証し

明治生まれの神髄、ここにあり

104

子供はそれぞれに家の仕事をすべし

108

身についた姿勢は今も崩せない

111

時間は無駄にするな

114

親孝行してね

117

人生最高に誇り高く、純粹に青春

120

父の背、母の顔にごめんなさい

123

十七歳五カ月で社会人に、教え子は三つ年下

126

病に克^かって再び教壇に立つ

129

教師冥利につきる

133

申し込みは「只」^{ただ}だよ

136

いよいよ結納。しかし、ひと騒動

139

野人は、死ぬまで野人だった

142

明治女は負けない——145

〔ひとり暮らしの歳時記〕

老いの味わい、これ春夏秋冬にあり

おうな
嫗ひとりのひな祭り——150

月一度命日の墓参合掌——153

わたくしは吉祥庵の庵主——156

亡き姪に導かれて花の旅——159

ふんだんに生と幸を味わう夏——162

涼をたのしむ——165

あの世はうらかな光の楽天地——168

ひとり居の年の瀬——171

年一回、一族全員集合のお正月——174

千両のいましめ——177

手抜き横着は禁物——180

〔死ぬまで、今の空気を吸って〕

わたくしの老年青春、ここが出発

六十余年ぶりの再会

184

わが声なき心の友

188

わたくしの夢、そして憧れ

192

日本の青春を生きて

196

昭和の轍わだちを踏むなよ

200

わたくしとスポーツ

204

あなたとわたしの会、いざ、さらば

208

あとがき

213

〔心は青春、老いは恵み〕

生かされて今、老いに華あり

ひとり老いて今日を生きる

年齢を意識しだしたのは、喜寿のころ

わたくしが老いを意識しだしたのはいつ頃からだったろうか。

わたくしは二十四歳で結婚して以来、四十年間家庭の主婦として生きてきたのであったが、この仕事は、いろいろ工夫して相手をよろこばせれば、自分も満足できる仕事である。専業主婦もまたよろし、というわけである。

わたくしは四十年間思うように家庭を管理して充足していた。

夫が黄泉よみの客となってひとりになったのは、わたくしが六十四歳のときであったが、その時点では老いを感じることはなかった。

すでに孫がいて孫からおばあちゃまと呼ばれても何の抵抗もなかったが、その時、娘たちに宣言した。わたくしは死ぬまであなたがたの母です、おばあちゃんと呼ばないでと。

以来彼女たちはわたくしに向かっておばあちゃまといったことがない。

年を重ねても自分が老人であるということをなかなか自覚できず、いつまでも若いつもりでいた。

夫との終戦処理を了^おえてから、何かと仕事にかり出されることが多くなり、少しばかり働く婦人の仲間入りをした。当時の日記をみるとかなりいろいろなことをしていたのにおどろく。老いなどどこ吹く風というように動いていた。

七十二歳で四国巡礼に出た。若いつもりであった。周囲はあやぶんでいたらしいが本人は何の懸念^{けねん}もなく実行した。旅の初日、はじめてはいた靴で少々足がややしく心細くなつて、娘のところへ電話した。

「お母さん、八十八カ所登るのも勇氣なれば、途中で中断するのも勇氣ですよ」
娘にいわれた言葉を今でも思い出す。

二日目からはタビックスにコルクの草履に代えて快調。おどろくほど高い階段を上り下りして完拜した。感激で涙が出た。

年齢を感じ出したのは喜寿のころからだろうか。それでも若い人たちの中で若やぐことができた。

そろそろ老醜を意識しだしたのは八十歳。夜の外出、旅行、パーティの出席などは控えるに作る決心をした。それでも内心は少しも年齢を気にしなかった。

しかし老いというものは自然にやってくるものである。毛髪が薄くなり、勿論白くなって手入れに気をつかい、総入れ歯という異物が定着し、耳が遠くなって補聴器のご用になり、皺は容赦なくはびこり文字通りの醜を自覚した。

そのうち感情の伴わない涙が片方の眼からサラサラッと流れる、なんの予告もなくスーッと涙が流れ出る、背骨は「く」の字となる始末。これを老醜といわでなんとしよう。老いの印である。

しかし老いても成長している証拠がある。爪がのび髪がのびるのだ。人なみに。

ひとり老いて自制しながらの毎日。五時半、ああ今日も生かされていたと目が覚める。それから凡そ一時間、頭の目覚めを静かに待ち、居間に出て一服。これが最高においしい。生きている喜びである。

床の上であお向けになって足、腰、腹の柔軟体操。入浴の日は六時二十分に風呂の湯を出す。その間二十分ほどの間に雨戸を繰り、身繕いし、新聞、牛乳を取り入れ、ゴミを出す。入浴時間は凡そ三十分。洗髪は週に一回。

室前に仕え、初茶、水、酒、花に水、灯明、香を焚き、食事、読経、写経とリズムカルに朝の日課は進み、九時半から十時にはおわる。

食事は朝昼晩と時刻をきめてきちんとり、基礎栄養をとるために常食として、豆類、白す干、昆布、らっきょうなどそろえておき、他にメインの品を考えて食事している。クリーニングに出す以外の洗濯と買物、掃除は週二回手伝ってもらっている。

生き老いることは至難の芸術である

鎌倉へ月詣りの日は、出発が九時半であるから、朝の日課はピッチを上げ定刻までに準備を終える。

車で凡そ二時間前後。途中で花を用意する。花は本堂以外に親戚、知人、墓友だちに六本求めて墓前に額ぬかづく習慣である。親切な個人タクシーの松沢さんに墓前のお供え品の他、万端調べてもらえるので感謝である。香を焚き、持参したテープレコーダーで故人の好きな曲をかける。

しばし谷地に立って天を仰ぎ、凡そ三十年来欠かさず参ってきたが、いつまで続けられるであろうかと、ふと思いがよぎる。わたくしの老いは迫った。

わたくしのために造っていただいた吉祥庵で、ご住職のご挨拶を受けたり、語り合ったりのひとときの後、仏壇を整頓して辞去する。

吉祥庵には参籠できるように生活用品一切をそろえてあるのだが、最近では参籠していない。わたくしは庵主なのである。

新聞雑誌はもう読むものでなく見るものとなった。なぜか、老眼鏡は限度の強さでこれ以上にはならぬという。それでルーペを用い、大文字の見出しを見て興味あるものだけ読むという怠慢さは老いの最たるものと嘆くこのごろである。

テレビのテロップも早々と消えて残念だが致し方ない。とにかく気合い、意欲が減少してよほどのことでなければ外出するのが億劫になってしまった。歩くことがいいといわれ家中を小動きするが、これまた腰が疲れる。

これだけ自覚しているが、他人から年齢をいわれるのは愉快ではない。

ちよつとの間ベッドに横たわりいい気持ちでまどろむことも。しばし快し。

朝の柔軟体操をはじめから立ち上がる時弾みをつけなくても立ち上がれ、パジャマのズボンも立って、つかまらなくても着脱が辛うじてできるよろこび。

老いのよろこびは小さく些細なことがうれしいのだから他愛ない。一本の電話、一葉の

はがきの私信がたまらなくうれしいのだ。これぞ生きているしるし。

若さというものの素晴らしさ、青年重ねて来らず年はとるまじきものの感が深いこの頃である。

ある達人が「^{とどこお}滞りなく生き、老いることは芸術である」と言った。けだし至言である。しかし至難の技である。

昔「婆さん息災こりゃ面倒」という言をきいたことがあったが、今やわれ、まさにその位置にいるとひそかに自嘲するのだ。しかし肉体は老いても心は老いず、人はいつまでも心に青春をもち得るとしみじみ思う。

老人呼ばわりされたくない

年齢のラベルは貼ってほしくない

今年もまた九月になった。十五日が近づく、敬老の日などと、日々やかましいことである。

国から金五千円也、区からはパンパンに張った座るとすべりおちるクッションや、大きな買物袋など。町会からは缶入りの飴玉と、きまって必ず届けられる。

もう少し老人の立場を考えた贈りものがほしいと思うが、こんども例外なくやってくるであろう。

かつて、細川隆元さんが税金をがっぽりとっておいて五千円などなにごとかと、あるテレビ番組で怒っていられたが、同感の老人がたくさんおられるのではないか。老人は自分を老人呼ばわりされたくないのである。はたからいわれるのは大へん迷惑である。わたく